

うたそら

第
12
号

2023
January

1

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄 「温」	18
一首評 「そらよみ」	22
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	24
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27

うたそら 第12号

発行：2023.01.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

Twitter ハッシュタグ #うたそら

「うたそら」では Twitter での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

連作欄 8首の連作 自由詠
 テーマ詠欄「2」
 一首評「そらよみ」
 短歌リレーコラム「望遠鏡」
 リレーエッセイ「いちごいちえ」

短歌募集



第13号 '23 2/28(火) 24時

•8首の連作 自由詠 •テーマ詠「2」1首

第14号 '23 4/30(日) 24時

•8首の連作 自由詠 •テーマ詠「本」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

あけましておめでとございます。本年も短歌誌「うたそら」をどうぞよろしく願っています。皆さまにとって、本年がすてきなことでいっぱい的一年となりますように。
 年末は大掃除もせず、珍しく早めに仕事納めもして、のんびり怠惰にみかんばかり食べて過ごしていました。そして年を越えて元旦。明け方まで「うたそら」を組むという贅沢な一年のスタートを迎えています。
 次号は3月発行の2周年号です。それにちなんでテーマ詠のお題は「2」です。すてきな連作作品や一首評など、お待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら 第12号

- 参加歌人様 74名
- 連作欄 56名
- テーマ詠欄 60名
- 一首評 8名

ご寄稿いただきありがとうございます！

コラム 雨虎俊寛さん
 エッセイ 武田ひかさん



illustration: kohagi chihara

あき子	@ponko_san	緒方燕柳	@o_sakuramochi	水也	@m_ya-o
麻倉ゆえ	@AsakuraYue	小崎ひろ子	@hitoritsukimiru	宮岡りょう	@myao_rrr
阿部蓮南	@renat815	音平まご	@nandemonaihito	深山睦美	@57577_77575
雨虎俊寛	@amefurashi3107	歌島孟	@Sinn1990	虫武一俊	@mushitake
有村桔梗	@chattenoire_k	河岸景都	@kareido1111	六殿めい	@meruummai
歩歩	@subperf	北谷雪	@kate_kawagishi	村田一広	@mucc12022
池田竜男	@tanakadragonman	君村類	@kmmr_r09	杜野詩季	@4kitanka55
石川順一	@Hitler57	玖嶋さく	@sacula_tanka	ゆり	@b7282e_akaneiro
一色凛夏	@88rnrn23	熊谷聡子	@ataoka2lib1	龍翔	@oppizuntsuan
宇祖田都子	@Shinnyutu2020	くろただけし	@tkuro2016	れいめい	@re14m_bot
泳二	@Eshimada	小泉キオ	@kiokoizumitanka	臙	@rou_tanka
江口美由紀	@miyuki_eguchi	小泉夜雨	@kozumi_yuu	waka-na	@CathyY01207758
大坪命樹	@OotsuboMeiju	咲兵衛	@zumnitakeishi		
		佐藤水魚	@sathio_tanka		
		汐射ハルカ	@haru_c17h17cd2n		
		西鎮	@xi_zhen_ivUT		
		雀来豆	@jacksbeans2		
		十条坂	@10key333		
		白石夜花	@yohana_no_sekai		
		寿司村マイク	@xHsBnR4wIwJ8M		
		泰源	@taruzon		
		たえなかず	@susuzuzu2009		
		多香子	@MEATsachi		
		高橋良	@atakashi_ry5		
		探偵ノホットケーキ	@_Lawliet_		
		千束	@a_oneko		
		千原こはぎ	@kohagi_tw		
		月草徳津久	@moon_grass12		
		ともえ夕夏	@croissant_hey_z		
		中村成志	@nakam8		
		奈瑠太	@nalda_aa		
		西淳子	@jacky24Ray		
		西村曜	@smakira		
		ネノノカナエ	@nekonokanae_uta		
		薄荷。	@aie0himeco		
		早月くう	@k_hayatsuki		
		日笠山	@higa_RENZAN		
		羊葉零	@hitsujiha_rei		
		廣珍堂	@hirochin_dos		
		飛和	@hiwa_towa		
		笛地静恵	@Ymox6rhzyJEZgwq		
		福山桃歌	@momoka_fukuyama		
		かじはる	@Penguinjumping		
		細川エリカ	@luwukasen		
		真岡まな	@mao_or_mana		
		まよけ	@mkskpompomfuwa23		
		御糸さち	@MEATsachi		

計74名

たくさんのお参加ありがとうございます！



前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ **現れる**
書き手 **武田ひか**

『土佐の牧野植物園へ飛ばしたり日差しとなり
てわたしのからだ／渡辺松男（牧野植物園）』
について書かれた大森静佳さんの評文のはじま
りに衝撃を受けた。その現代短歌二〇二二年
十一月号にある評文のなかでは、一首の「て」
に着目する。いい歌を取り上げているだけでな
く、なぜ面白いのかというその本質に迫る技だ
と思った。はじめてその書評をみて痺れた時の
感覚をよく覚えていた。

「世の中には創造する天才があるように、探す
天才もあり、書く天才があるように、読む天才
もある。——ポール・ヴァレリー」
最近、ポール・ヴァレリーが書いたとされる言
葉を見つけた。ポールヴァレリーは19世紀から
20世紀にかけて生きた人物だが、この言葉は誰
もが創作者になり、コンテンツがあふれる現代
においても金言である。作品に生かされている
あなたの、愛をこめた叫び声や作品をさらに輝
かせる。大森さんの眼から生まれた書評は、作
品をさらに鮮やかにしている。わたしたちはつ
い作る人を上へ上へと持ち上げてしまいがちだ
が、一次作品を創造することだけが「創作」に
関わる手段ではない。読むことや探すことにも
クリエイティブティは宿るのだ。評文や感想文
にはもっと可能性がある。短くてもいい。心に
触れた言葉を並べるだけでも。その営みはとて
も創造的だ。そうであったほうが世界が楽しい。
わたしは、そう信じている。

ない映画のフレーズをそっと引用してみる。そ
の瞬間に埋もれていたかもしれない作品が、あ
なたの声で掘り起こされて姿を現す。声は表面
についていた土や草を落として、やがて作品は
輝きを強めていく。いままで見えていなかった
その鮮烈な光は、より多くの人の眼を奪ってい
くだろう。
世界は、あなたの声を、あたらしい眼の出現を
待っているはずだ。探す才能や読む才能はまだ
まだ眠っている。たくさん作品を浴びながら
磨いてきた才能が（そう！才能とは磨くもので
あった）、作品をさらに彩っていく。もし素敵
な何かを見つけたら、叫んでほしい。いや、叫
ばなくてもいい。小さな声でも十分だ。ぼくも
何か見つけたときには、あなたへと何かを伝え
たいと思っている。作者だけでは千年残る作品
は作れない。多くの人には渡せない。作品の光
はひとりでは伝わらない。光を見つけ出して
響かせるのは、わたしたちの眼や声なのだ。

語り部は君だったのだ風も星もそのくちびるは従えながら

武田ひか



#ドトールの恋人

あき子

好きじゃないひととも話す笑い合うえらいよみんなよくやってるよ
メカニズムなら知っている大抵のことにはちゃんと理由があるのに
異国語が弾むドトールのテラスで最後にしたキスを思い出す
ここからは見えない星の瞬きをとらえたい 1.0とかじゃなく
快速を快速じゃなく急行とすんなり言えた自分に気づく
理由なんてなくてもできる安心があるならひとつ、テイクアウトで
どの駅で会ってもおなじ体温とつよさで抱きしめてくれるから
宇宙には宇宙ステーション 僕らには居心地のいいコーヒーション

君と紅白

阿部連南

紅白をしようよ 君は純粋な、私は熱い声の持ち主
「白餡のたい焼きききみと食べたい」を携帯に入れやっば生きたい
食欲はいつからだって青春だ好きかもって日のヤンニョムチキン
コンビニでポテトチップスばかり見る君は世界で塩の結晶
この量をちようどいってわかっても恋をたくさん味わうカルピス
この円をはみ出してしまうピザソース君に会えたら持ち手ができる
夜が更ける前にシチューを食べきって栄養のある私で会おうよ
人生はまだひとつぶん色はまだ変わるアソートのさくらんぼ餅

連作欄
8首の連作 自由詠
#うたそう

なうまち夢遊歩

雨虎俊寛

あおによし何度もお辞儀する鹿にきみと何度もお辞儀を返す
花街をいまも残してならまちに浅紫のスナック看板
打ち水に葉を濡らしたか大きめの睡蓮鉢に雲は映って
石仏のあいだあいだに桔梗揺れこの旅はもうきみのまにまに
ふじ色のお猪口受けとり春鹿でわかりもしない利き酒をする
軒下の身代り申に上気した頬寄せたからF値を下げた
まじないに摘んだばかりの紫陽花がお手洗いには吊るされている
町家カフェの格子を通すやわらかい光の入る午後3時過ぎ

ポケット

池田竜男

背に張ったちからに顔を押しあてるポケットのないものはそうする
蝙蝠のようなポケットちようだいな夜は素肌でどうにかするよ
ポケットのないものとして鍵閉めず家でふたりでテレビ見ている
ポケットがなくても平気な Beyonce も大きいつばの帽子をかぶる
着ぐるみを着たくなってるポケットを早く鉄で切って作って
眼の中にあるポケットの紙人形しずくに濡れてだれか分からん
あなたではポケットになれないことのさみしくてあたたかいお腹
ポケットじゃなく足あとが胸にありときにまるまる猫二匹いる

惰眠のせいで

歩歩

気が触れたような風音 ビー玉の中昨日より綺麗に見える
日が落ちて誰かが闇を撃つまでの8を寝かせた無限のような
どうやって寝ようか迷う天井にむなしさの落書きが嵩んで
ラップバトルを聞き漁ったサーバログ すぐに鼻呼吸が苦しくなる
耳に水 アンチテーゼもありきたりになって一匹のキリギリス
脱いできたチアフルがまた冷めていく夜の見えないロッカーームで
役に立たない夜の暗さが、なまなましい明け方の暗さが、惰眠のせいで
メランコリー 健やかなる被弾を終えて逃げていく寝台の記憶

カワセミを見た後に

石川順一

サマセットモームの意志を推測しアイリスの花を好きでよかった
葉が落ちる岩にメカ図の紙を置くカワセミが水路をすれすれに飛ぶ
波長合う人や物には杵が有る乱れた髪を櫛で整え
騒ぐのを止めた鳥たち森林にワサビの畑が有ればよろしも
勃興のニューオーダーは歌うべしニューバランスはケセラセラかな
屋根の上上弦の月が見えて居る食パン食べてカフェオレを飲む
入刀の後に祝福する鳥が冬空へ戻り雲が無くなる
えのきだけでもやしとキャベツが入るラーメンビールと日本酒どちらを選ぶ

こは奈良公園界隈だということを教えてくれる。
幼い頃より何度も訪れている僕には見慣れたもの
のだけど、初めてきみを連れて来た時はニュース
で見たままと言ってた。そして以前のグルー
プ吟行の後で詠んだ歌を推敲し直した。

あおによし何度もお辞儀する鹿にきみと何度
もお辞儀を返す

猿沢の池からまっすぐ南へ延びる道は「なら
まち」の入り口の一つ。世界遺産でもある『元
興寺』を目指す前に、池の西側に広がる花街と
しての歴史を有する元林院町周辺をそぞろ歩き。
この町並みは今も昭和レトロ感ぶんぶんの飲
食店やバー・スナックなどが立ち並ぶ歓楽街と
しての趣を強く残して、かつての花街らしく入
り組んだ細い路地や複雑な構造を持つ建物も多
く存在する。ここで詠んだ歌です。

花街をいまも残してならまちに浅紫のスナッ
ク看板

ならまち大通りを越えて『元興寺』へ。目当て
の石仏群と桔梗は本堂の南側のやや奥に咲いて
いる。ここは以前のグループ吟行では訪れなかつ
た。桔梗の時期では無かったものもあるが、もう
ここに誰かを連れてくることは無いだろう。そ
んな場所だ。そして詠んだ歌です。

石仏のあいだあいだに桔梗揺れこの旅はもう
きみのまにまに

暑かったのと平日でもう紫陽花が終わりかけ
で桔梗も咲き誇るほどでは無かったこともある

のか、僕以外の参拝者も数えるほどだったので、
作歌に浸るにはちょうど良かった。それなりに
メモを取ったり、写真を撮りつつ寺を後にして
少し東へ進む。もう一つの目玉というかお目当
てのワンコイン利き酒をするために老舗の『春
鹿酒造』へ向かう。あの日と同じ行程だ。あの頃
はたしか400円だったか？ちゃんと思い出せ
ないけど、レジにて500円で利き酒グラス（4
色ある）を購入すると、店の奥の席に案内され、
5種類の利き酒をした。利き酒グラスがこの時
期がこの色だから来たかったものもある。そして
詠んだ歌です。

ふじ色のお猪口受けとり春鹿でわかりもしな
い利き酒をする

利き酒が終わり、にこり酒がやっぱり好きや
なあと。奈良漬の試食もできて「春鹿」の酒粕で
漬けたんだ奈良漬は全部で3種類あり、中でも燻
製したうりの奈良漬がめっちゃ美味しく、最後
にデザート日本酒ともいって低アルコールの
「ときめき」まで試飲させてもらい、美しい利き
酒グラスも持ち帰れて、これで500円はエエ
もんやと大満足で後にしました。（消費税が上
がる影響で12月30日に利き酒グラス持ち帰りは終
了となり、別途販売になるそうです）

ほろ酔いにはほど遠いけど気分良くなり、また西
側に戻って「ならまち」散策をする。『ならまち
資料館』、『庚申堂』、『ならまち格子の家』を眺め
ながらただただ歩く。目を閉じてはいないのにあ

の日は、あの日々が次々と思い出されて現か夢
かわからなくなる（テーマ詠「夢」をタイトル「な
らまち夢遊歩」で回収）。お一人様吟行だからこ
その時間旅行のようなものか。50歳にもなろう
というオッサン（もうなりました）が未練がま
しく思い出巡りをして必死に作歌している姿は
……まあ、見れたものではありませんね。

そして、ならまちと言えば軒先で目に付く何匹
もつるした赤い猿のぬいぐるみの「身代わり申」。
所謂、さるぼぼです。庚申さん信仰の残る土地
柄で家の中に災難が入ってこないようにと願う
庚申さんのお使いをかたどった魔除けのお守り。
両手を頭に置き、まるで「ごめんね」をしてい
るように身をかがめた姿が愛らしい。最近、仕
事で一眼レフカメラを扱うように。まるで一眼
レフカメラを使いこなせてはいませんが、虚実
交えて詠んだ歌2首と以前に詠んだ歌1首です。

軒下の身代り申に上気した頬寄せたからF値
を下げた

まじないに摘んだばかりの紫陽花がお手洗い
には吊るされている

町家カフェの格子を通すやわらかい光の入る
午後3時過ぎ

まあ、目的は達したので、この後は気持ちを切
り替え知り合いのお店で薬膳ランチをいただき、
多聞城跡を訪ねて帰路につきました。ちなみに
「うたそら」用に追加された1首は今号でご確認
いただければと思います。

短歌リーコラム

望遠鏡 12

短歌にまつわるあれこれについて

自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…

書き手 雨虎俊寛

テーマ お一人様吟行記

梅雨明けが待たれる7月初旬に「お一人様吟行」をするため思い立って奈良へ出かけた。それには訳があつて、歌友の豊増美晴（とよよん）さん発刊の詩歌冊子「楽詩」の短歌コーナー「和いる diary」へ7首連作を提出するネタ探しをするためだ。

奈良と言っても東大寺、興福寺、春日大社などがある奈良公園はコロナ禍が緩みだした影響か観光客や参拝者、修学旅行生などであふれている。そんな所へ50歳になるうかというオッサンがお一人様でウロウロしているといたたまれなくなる。なので、にぎわいから離れて訪ねたのが猿沢の池の南側一帯、元興寺の旧境内に当たる旧市街「ならまち」。近年ではお洒落な町家

カフェや雑貨屋さんが増えて人気のスポットになつてはきたが、昔からの暮らしが匂う町である。

さて、お一人様吟行をする場所として「ならまち」を選んだのは幾つか理由があつて、連作の提出先である「和いる diary」には2つのお題が毎回課せられている。

・テーマ題「夢」

・カラー題「桔梗色」

この2つの条件のもとで連作を編む必要があり、割と安直に「桔梗色」を詠み込もうと真先に思い至ったのが過去に訪れて印象に残った『元興寺』の桔梗、紫陽花という花たちで、桔梗が見頃だろうということと、それにワンコインで利き酒ができる『春鹿酒造』にも立ち寄りつつ、ほろ酔いで路地、小路、丁字路など迷いそうになりながら巡る木造りの町家、庶民信仰や衰退した花街の名残、そんな暮らしや文化の匂いが漂う「ならまち」は懐かしく親しみやすく夢心地に浸れる町だなあと。コロナ禍前にグループ吟行でも訪れているので、その時のストックもあるし住まう大阪の隣県という足の運びやすさもある。そして何よりも僕がお一人様吟行をしがちな場所の条件として一番の理由となるのが未練を残す思い入れ深き場所。まあ、そんな理由付けで向かうことにした。

この日はとても暑い日だった。近鉄奈良駅の東改札口を出て、階段を上ると定番の待ち合

せ場所である噴水の中に立つ行基像が涼し気というより、噴水が日差しを反射して暑さをぶり返させる。あの日もとても暑い日で先に待っていたきみが僕の手を取って歩き出すも、土地勘の無さですぐに立ち止まってしまったのを不意に思い出した。やべえ……こういう気分には速攻？即効？で包まれると気もそぞろになり過ぎてメモを残し忘れる傾向にある。いくら相聞歌を詠みに来ているとしてもアカン過ぎるやろと、いつでもメモを取ったり、写真を撮るるように空いている右手にスマホを持って歩き出した。

突き当たりの三条通りは市内のメインスト

リートで、古都の街並みをお目当てに来訪する外国人の観光客も多かったが今はまばらだ。三叉路を左に曲がり、猿沢の池の方へ。高速餅つきでお馴染みの『中谷堂』はいつもの盛況さは無かった。

猿沢の池の周囲はずいぶん様変わりした。スターバックスがあるしそれだけで別の場所に来たような感覚に包まれるが、近づいてきた鹿がこ

屋上猿部XL

宇祖田都子

閑古閑古、われ観光鳥

大坪命樹

指先の乱数表が指し示すオオアクリクイの反逆の歌
ちっぽけな惣菜食べた口笛の影絵でつくれ迷宮回廊
避雷針鞭打つヴァニラ鉱物の結晶キック奇妙な神話
白い襟胎児の頭部にある寝癖ペーパーウエイト冷たい泉
片思い受胎感覚輪唱ス潜水艦ニ似タ猫目石
片方の乳房は死後の月めいて寒いホームに南洋の夢
無意識が耳たぶを卵焼きにするジャン・コクトーは靴のつま先
光るもの海のけだもの群れるもの発声練習するかたつむり

戻れなくなる

江口美由紀

冬の運河

小崎ひろ子

実家でテレビのへやと呼ばれていた場所は恙なくテレビのへやでした
軽トラに三基ならんで冬晴れの墓石店頭展示販売
なくなりそうなシャンプー洗剤歯磨き粉全部あなたが先に気がつく
ねえ、やめといた方がいいよとボックス席の向かいの人が隣の人に
ゆるせなかつた記憶を三つ放したら小枝に引っかけかかってうるさい
結婚記念日はクリスマスで土曜日で奥歯の治療の予約があつて
ほどけたら戻れなくなる風の日のわたしをブーツの踵に嵌める
誰が誰でもいいような冬の名駅になぜかわたしが見当たらず

映画はてて街に出た時めずらしく時雨の降り方で雨降り出しぬ
道筋を示すスマホは明るくて予備のバッテリーが時折重い
クルーズの半年前のパンフありコロナが止めた時間ここにも
そして運河の駅を越えたら百船町といふ地に浮いて一艘の舟
雨宿りしつうつろに空を見るわれらに扉を開く歌人^{うたひこ}
まれにかういふ事はあるので驚いたりしないのですが地図に雨粒
今年死んだ人のことなど映し出すテレビの後に踊る若者
たぶん今は戦後なのでおまつりだ空き巣がねらつてるとか歌つて

原始より

歌島孟

低く垂れ込めた雲間をかきわけ光のように土を掘るのだ
 恐竜の影を恐れていた先祖、盆供の先にいるか茅原
 バラバラの死体は石化して今夜、ライトに照らし出される陰部
 何事も変わらなくてもいいことのアイドルでいて。シーラカンスよ
 群体のひとつであってよい僕ら、奇妙に伸びるビルを見上げる
 泥濘に沈みゆく死の一瞬がうづもる上へ、雪が降る夜
 絶滅の跡を追う、って探偵を気取って崖に踊る人類
 しゅうそくをするものならばうつくしくアンモナイトのせはうずまいて

インターテインメント

河岸景都

きらきらのパッケージだけ楽しんで罪悪感を廃棄していく
 現実を忘れるために輝きを消費している、赦さないでね
 私には無いものばかり渡されて眼の奥に散る火花が痛い
 選ばれた人になれない、いつか見たダンスみたいに暮らしたかった
 戯曲にも劣る人生、作られた物語より生きるのが下手
 ステップの華麗な人を見詰めれば心の穴が少し埋まった
 酔いたくて非日常を飲み干せば虚構ばかりが味方になる
 あの人の歌が未だに離れない呪いのように背中を押される

クラスターふたたび

涸れ井戸

誰からも嫉まれていた看護師の陽性の急報にざわめく
 スクリーニング検査にて利用者も二人感染してるとわかる
 職員にさらに多くの陽性が2ユニットを隔離棟へと
 防水の耐性強くガウン脱げばボタボタとこぼれ落ちる汗
 仕切りなど一切ないが此処からはグリーンゾーンチーかまを食う
 熱発で十連休のリーダーが羨ましくて涙を流す
 お外ではワールドカップファイバーでタイムラインは毎夜お祭り
 駅前に青色ライトを着飾ったクリスマスツリーが聳え立つ

さよならフェザー

氷谷雪

私から羽根降る日だってあったのだ瘦せたダウンをしみじみと脱ぐ
 可燃ごみに仕分けた先で火の鳥のように飛んでね さよならフェザー
 もう母に選んでもらった羽は無くわたしはわたしの冬を越す術
 ああ、こちらもお似合いですと店員は試着のたびにつむじ風生む
 近づけば夫とわかる幹のごと佇むチェスターコート男
 新品のラビットファーに顔を埋め昔のことなど想えば泣けた
 水鳥の夢をわずかに託されて柔い鎧で春へと向かう
 「くたびれたダウンが風に乗るところ、見ました。南を目指してました」

沐浴の溢れたお湯でユリイカと叫ばない
 から赤ちゃんだった

寿司村マイク

一読して笑って、「ユリイカ」についてググった後
 にまた笑っちゃいました。シュールな感じが好きで
 す。Wikipediaによると、古代ギリシャの学者アル
 キメデスがお風呂に入った際に水が溢れたのを見
 て、ある発見をして「ユリイカ(分かったぞ)！」
 と叫んだそうです。たぶん、このエピソードになぞ
 らえた歌でしょうか。「ユリイカ」と叫ばない子
 を見て、作中主体が「赤ちゃんだった」とユリイカし
 ているのもおもしろいです。

一首評

西淳子

ハードルは倒しても良く白線の粉を定着
 させる秋雨

中村成志

トラックへ前日引かれた石灰の白線は、降雨により
 地面から飛散し難くなり、定着する。ハードルも白
 線も、主体の、もしくは読者への何らかのイメージ
 として配置されているのだろう。記憶、もしかする
 と未来から現在を振り返った、想定される記憶にも
 思えるが、それをちらちらとイメージしながら、自
 らの背中を押し、スタートラインに立つハードル走
 者の姿が見えた。

葡萄酒をください今夜ひとしきり 彼は
 フランスの風、乾杯。

宮岡りょう

テーマ詠「果実」。
 「ひとしきり」の不思議さが効いている。その後
 三人称「彼」が出てくる。乾杯をする場にいる人
 物だろうか。下句をフランス語にすると、「Il est le
 vent français, sainte」である。le vent (風)は、
 le vin (葡萄酒)と音が似ている。葡萄酒のことを
 彼と表現しているのか。
 「ひとしきり」は「風」の吹きゆくさまを修飾して
 いるのかもしれない。

一首評

高橋良



一首評

西鎮

一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

始末書をサビ残で書くリーダーは獣の口
で珈琲を飲む

涸れ井戸

連作「一日三度」からの一首。介護施設での出来事を淡々と、しかし正確に正直に歌いあげています。仕事後の一服こそ穏やかな時間であればいいのに、歌には雑にコーヒーを飲まざるを得ない切羽詰まり感が漂ってきます。「獣の口」の言い回し、この一言に職場環境の状況とそれへの想いが凝縮されています。読む人を選ぶ歌かもしれませんが、現状に思いを寄せて真正面から向き合って読みたいお歌です。

一首評

杜野詩季

これまでの私のサンプルあるいは葬具
空っぽの香水瓶がいとしい

北谷雪

連作「はなとびん」。二首目の不自由なびー玉は、ジャムを塗り合うあなたと私が外の世界に出られないことの喩えか。そのラムネの瓶が後の歌の瓶のイメージと膠着して、瓶の内外がクラインの壺のように接続する。そこでこの歌、空の香水瓶がサンプルでかつ葬具であるのは、カラスが美味いと言った過去の私が入っていたからなのか、最後の歌でその瓶の中にありつたけを詰め込む。象徴的で不可思議な世界が、連作の中に鮮やかだった。

一首評

大坪命樹

本当に言いたいことを濾過したら残った
方が感情だった

君村類

優しく揺れる感情がこころに響く連作。そして喩の巧みに魅かれる。一首目の「濃く長い影」、三首目の「下水」等々。わかりやすくてさらりと書かれていて、なのに言葉が響いているのは、きつと本当に歌いたいことがきちんと込められているからだと思ふ。引用歌では「濾過」という喩が絶妙に面白い。いったい感情はどちらに残ったのか。ろ紙の方なら結晶か塵か。ろ液の方なら残渣か無垢か？どちらにしても面白いのだから不思議。

一首評

雀来豆

白鯨が身じろぎすればひとつふたつ傘が
開いてゆく人の波

佐藤水魚

歌意は素直だが、不思議な歌。もし雲が身じろぎする様を上空から眺めたとすれば、雲自身に遮られ地上で開く傘が見えない。逆に地上からだと、開く傘を数えられない。狭間の宙に漂っていたなら、視線を上下にせわしなく動かすことになってしまう。

この情景を眺めているのは、複眼を持つ昆虫かあるいは全能の者か。降り始めた雨に濡れながら、視線はただ天空と地上を見つめているのだろうか。

一首評

中村成志

週末の雨を報せる予報士の眼で告げられ
たさよならだった

西鎮

声ではなく「眼」、人をよく見ている主体だ。予報士にとってみれば天気が良からうが悪からうが関係なく、ただ仕事だから伝えている。この伝達は大体言葉で行われているだろうから、週末に出掛ける予定がない限り画面の眼などは見ないし、見なくてもよいのだ。でもその眼をしっかりと覚えていて、さよならを告げられているさなかに思い出してしまふ。どんな眼をしていたのだろう、それを思うだけでイメージの膨らんでいく一首。

一首評

小泉夜雨

帰省

わたしたちからわたしへと戻されてそれぞれに見る車窓の眺めはつきりと終点がある特急の切符の文字をしずかになぞる兄弟もつまりは他人 生き物の気配が絶えている冬の庭初氷ばかりと割れて婚姻の有無で試される人間性
ごみ箱のごみはまとめて捨てるものいつか死ぬのとだいたい同じまっすぐに煙を上げる線香は是でも非でもないからやさしい一枚の枯れ葉になつて佇めば駅のホームはほとんど湖面
これからの記憶の中で灰色で描かれていくふるさとを去る

君村類

ずつとの

小泉キオ

眠れない夜に見にゆく新しい家族が決まりましたの投稿 ショップには行けないハンディ持ちの犬くんには知らずに生きてたよかったねよかったねつて新しい名前とか見て臉を閉じる
あたたかいミルクみたいなやさしさを分けてもらって眠気を手繰るやさしさの搾取かなあこれ俺がしたことつて心を押しただけだし
できることあんまりなくて年末におもちゃの寄付だけ毎年してる
ずつといる繁殖犬だった7歳にずつとの家族ができますように
できることあんまりないけどうちにいる愛犬はせめて幸せにする

足跡

くろだたけし

ジュリアンヌスープ

咲兵衛

浴びたなら凍ってしまう光線のように日が射す雪のあいまに
近いのでいつも歩いていく店の横切るだけの大駐車場
壊れてはいないけれども交換ができない電池で動いてたんだ
眠れないままに眠れば夢として後ろ姿の僕を見ている
冬眠の習性のない生き物の冬の眠りは誰がまもるの
ひらひらとよく動く手を見ていたら僕をあやつりだす猫の霊
閉ざされた物語からぬけだせば見覚えのある未来などなく
ゆく先を知らずについてくるような雪に残った僕の足跡

薄れゆく意識のなかで聴くなる耳 看護師に怒鳴る医師あり
子宮口を塞いでしまったバルーン・メトロ 出られない出られない夜
何もかも分かっていながら…父は母の言葉に救われ一緒に泣いた
あとはもう生まれるばかりの美しき小さき妹は棺桶に眠る
「へえ、ちっちゃくても全部揃ってるのね」骨董を覗き込む義母に刺されて崩る
前科者と笑つてくれる産院で三年後母は妹を産む
退院後父の作るジュリアンヌスープ 千切りピーマン・人参・玉葱
ほら、ごらん、きれいに揃えて刻むんだ かならず美味しいスープになるから

円卓で北京ダックと叶わない夢を削いではきれいに包む
 昏睡の手水鉢から花あふれ愛されるしあわせに溺れた
 手をつなぐ代わりにくれたフリスクが頭をひどく冷やしてくれる
 やさしさの暴力だつて分かつて今日も黙って右頬を出す
 存在のひとつひとつを確かめて冬の窓から漏るハンドベル
 白百合を纏う乙女のリトグラフ 純潔の湖うみに溺れたかった
 長調の色味を帯びた疾風が憧憬の綾をたやすく解く
 明け方に穢した喉をふるわせてふたりのためにうたう讚美歌

冬初むる

汐射ハルカ

踏面の浅い階段崩れおり外人坂は音もなく秋
 いつまでもひとりきりだと知る朝に呼ぶ声をする微かだけれど
 下草に埋もれ日陰に咲く花は誰にみられることなく枯れる
 鈍色の空の到来見上げては朝に白百合はなさき香る
 雪雲は層状にして迫り来るアップルパイは劈開をして
 順調に降り積もりゆくこのまちにいらぬものを消し去るように
 堰に立つ洗剤の泡消えてかない背中の要らない体温うざい
 冬初むる夕ぐれ舗道なみだいろほんとうの恋むねの片隅

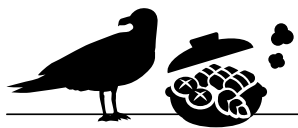
砂丘地

マグカップの持ち手のアールいつだかの歩道橋からみた街の灯の
 カーペットはわずかに綿埃をたててゆっくり忘れてゆくひとがいる
 トイレットペーパーが切れラックから芯をはずしている 挫折とは
 冬の砂浜によこたわるベンチの背もたれに褪せた文字列ひとつ
 あのライトフライでタッチアップされた記憶は消してあげられなくて
 告白のこつを教えてくれたけどたぶん使える日は来なそうだ
 確かあの小山の向こうは砂丘地でいつまでも忘れていないあなたを
 古い橋の欄干撫でてこの街はまたすこしだけ遠くなつてく

JAZZ

雀來豆

So Long Eric タイムラインに放たれる無数のハートマークの連なり
 黒鍵の罅をたどれば届くのかピアノのなかのやわらかい場所
 たまらず塩ピーナッツを吹きだしたデイジー・ガレスピーの頬つべた
 坂道を転がり落ちる鞆から古い楽譜をひらひらさせて
 ドラマーが歌手を兼ねるからつくり返すピアノマンの暗い口腔
 バスクラリネット鳴らせ、鳴らせ、わたしはここにいるあなたは遠くにいるのだから
 水無月ぼくら魚のように沈黙しビル・エバンスの水玉を聴く
 行こうぜぼくら永遠のぐるぐる団みたいな名前の歌だきしめて



- ◆ 元彼や子のありなしを割愛し岩盤浴にならぶともだち
- ◆ 寒かると部屋に連れてく雪うさぎ吾子の手のひら水滴ぼたり
- ◆ 受け取った傘の縁あなたの手の温度 雨に濡れてもひとりじゃないの
- ◆ 季節なく咲くラベンダー温室のような彼から嗅ぎ取る疑惑
- ◆ ぬくもりしか知らないみたい文末のひとつひとつにハート並べて
- ◆ あたたかな場所でありたい泣いていた温度も熱も知識のなかで
- ◆ 温かい家庭を築いてくださいね ひとの恨みも燃え種にして
- ◆ 北極に行った人から「常温で保存」と書かれた土産をもらおう
- ◆ 冷蔵庫に入れ忘れてた室温のビールが飲み頃になつてゐる冬
- ◆ 重なると温ぬくみが積もる僕たちは生き方をまだ忘れていない
- ◆ 蕎麦つゆを温めている畢生を結ぶ言葉はまだ見つからない
- ◆ 大晦日感ないよね、と言ひながら今年も家族で囲むすき焼き
- ◆ うつむいた睫まつげにしづりの六花あり君の稚わかさを知りそめし頃
- ◆ 甘酒が配られてゐる街角できみの隣にゐたらよかつた
- ◆ 市街地に深杭を立て搾り取る温泉ははや地球の涙
- ◆ わくわく
- ◆ 龍翔
- ◆ れいあむ
- ◆ 臙
- ◆ wdk-a-no

テーマ詠 「温」

冷えた赤い手で祈ろう 「あたたかく ありますように きみの未来が」
 ◆ 探偵とホットケーキ

ねえ叱って不器用に手をつないでてこだけ温い誘蛾灯みたい
 ◆ 千束

ゆるやかにココアを溶けば世界から切り離されていく暗い部屋
 ◆ 千原こはぎ

しんしんと雪に凍みる手赤鼻の「あつたかいね」と握る君美し
 ◆ 月草俣津久

まはらない電子レンジを買ひつる日の母の人差し指さびしさう
 ◆ ともえ夕夏

手袋のくすりの指が詰まるとき裏返しなる毛玉の生まれ
 ◆ 中村成志

心臓は使い捨てカイロ ぼくたちはみんなだれかをあたためられる
 ◆ 西淳子

あなたからみじかい懺悔聞く間にもホットココアはホットのまま
 ◆ 西村曜

体温を分けあつて暮らす明日もまた空がすつきり晴れたらいいね
 ◆ 薄荷。

左手の温度を右にわけながら帰帰してゆく思考 朝焼け
 ◆ 早月くう

ツバメ眠り夜風は雲をふきさらす どうぞ味噌汁は熱いうちに
 ◆ 日笠山

部活終え電車で眠るぼくたちがふたりで共有している鼓動
 ◆ 廣珍堂

温めてとろけるチーズ やわらかな触れ合い方をきみに教わる
 ◆ 飛和

さといもをたつぷり入れたのっぺいのあたたかきかなふるさとの味噌
 ◆ 笛地静恵

ひとりでも歩いていけと生ぬるい風に両頬はたかれて 春
 ◆ 福山桃歌

おやすみなさいからあけまして

十条坂

おやすみに守られている日もあった未読のままのメッセをなぞる
 またひとつ古びたわたしのひとりごと おはようが夜を打ち消していく
 あなたには私は見えていないでしょうはじめまして、にはじめまして、を
 こんにはほとんどな一日か知らないが青天に踊るタオルの群生
 のぼり坂だけの人生やつぽーと言え返ってくる声、やつぽー！
 さよならが人生だという、さよならすべての季節を書き置きにする
 今日くらい職場を好きになってやる良いお年を！を定時に配る
 あけおめと言わなくていいねいあなた今年も変わらなかった、うれしい

僧伽藍パーン

寿司村マイク

東大に数人入る仏教系高校講師と僧侶を兼ねる
 春の陽を伽藍は貯めて静かなる住宅街の境内に梅
 副担の生徒の親にはねられて一週間の入院となる
 欠かさずに毎日変えてた一昨日の今日の言葉を貼る掲示板
 書道部で臨書に励むO型の娘が広げる全紙のしるさ
 立ち止まる市民のわかりみ門前の娘に過ぎないはずの名言
 テキトーな娘の言葉がiPhoneに拡散されるをベッドで知る朝
 「徒然」とタイトルつけたアイドルのブログを閉じた主治医の回診

引き潮

たえなかず

いいねゼロだから自分でいいねした青春みたいで可哀想でしょ
 悪いことばかりじゃないよ悪い人ばかりいたけど 寄りかかる癖
 街に雨教会に鐘、樹には風 罪は携帯電話の中に
 風景のすみにごみ箱 老けたねえ、元恋人とキスをしながら
 真冬には真冬の昔話する頭上の翳る月をあなたに
 CMをまたいでふたたび繰り返すテレビのようにしつこい別れ
 だめ、今は女優ですから大盛りのライスと共に照らさないでよ
 ファミレスの灯りが暗い今夜こそ愛の世界が終わってほしい

初春の

多香子

初夢の船長さんはアザラシで冰山みつけアウアウと鳴く
 年替わる真夜の静かな音を聞く誰もが思う明日の明るさ
 この頃は近所の猫の毛並さえ知らぬ都会の高層マンション
 窓際のぬいぐるみサメに替えてからファーファー言って威嚇する猫
 目白来る春は遠くて向き合いの炬燵で白菜なべを食べる日
 奇術師がシルクハットから出してくるウサギのような愛をください
 冬の日の段々畑にみかん揺れだんだん遠くなる故郷よ
 春に向け二人の馬車は雪道に強い気持ちの轍をきざむ

妻の祖父の住みし家にて暮らしたればわが子は妻の血を引くと知る
 花見にて団子を三人して食ひき出産前日とも知らずして
 妻のぬぬ広き家にてわれと子と寝入りたりけり出産の夜
 コロナ禍にて付き添ひはなく妻一人息み息みて子を生みたりけり
 子が生まれ夜中に電話ありたれどわれは寝てをり朝に報を受く
 わが父の生日の前に生まれたるわが子の名には父ゆかりの字
 幼子が嬰兒に遭ふ日が来たりスマホの画角に二人を収むる
 嬰兒の軽さを忘れぬたりけり小さき湯船に体を洗ふ

彫り起こされて

千束

暗転 ブラッパ なじんだ毛布をひろいあげふいに世界の足音がする
 死んだから神になるのに生きている人をよすがに歩いてしまう
 この唄をいつか忘れる手をつかみ天国さえも乗り過ぐすから
 ああ幕間 縫いとめた目をほどかれてプリキの心も残機もなくて
 ティーカップはげしく割れてあなたからこの世のすべてを奪い取りたい
 われら怨嗟われら地獄の守り人と夜より暗き裾ひらめかせ
 あのひとに触れられ彫り起こされたのに不揃いになる髪先つまむ
 ろうそくの呼吸ゆらめき来世でも出会うのだろう カレンギル 閉幕

うっかりと現実には飲まれないようにホットココアを溶く大晦日
 突然のLINEで呼び出されることに慣れてスタンプだけの返信
 外灯に輪郭だけを光らせていつもの顔が「おう」とほころぶ
 賑やかな夜更けを歩く広い背のきみには秘密を渡したかった
 賽銭をすこし多めに投げ入れて叶わないと知ってる願いごと
 手を打って目を瞑るその間だけ許されていて隣に並ぶ
 マフラーに顔をうずめる(つよくつよく願うすぎたら泣きたくなった)
 寒そうだからつてくれたホットココア やさしさだけの傷跡になる

雨のち雪ときどき君

月草俣津久

あの雲を怪獣、戦艦、龍、鱈思ひ描いた遠い夏消ゆ
 冷めるまで雨は盲目凍りつき白く染まつて雪になる恋
 「また明日」言ふたび胸に寂しさの風が吹くから君が大好き
 君の飲むコップの水をぶち撒けたい服乾くまであと少しだけ
 夕さりて蟬の聲引く風のやうに君の手をひく誰そ彼の闇
 「傘がない？」ごめん母さんでも聞いて無くしたからこそ濡れず帰れた
 一度でも枯れてしまへばもう二度と逢へない君は花より儂い
 夜の川に落ちるさらさら星月を映すあなたの色が知りたい

大切に守られていた体温を奪われてゆく冬の悪魔に

◆ 河岸景都

マスクを取るあなたの鼻の温いこと少しだけ冬つまらなくなり

◆ 北谷雪

体温を確かめあったあとに飲む水の何より透明なこと

◆ 君村類

レディグレイ茶葉はゆたかに泳ぎきりやがてしずかに沈み夕映え

◆ 玖嶋さくう

柚子よ柚子こんなにいびつな形でも香りを放って温めてくれる

◆ 熊谷聡子

おはようさん寝ぼけまなこに温玉を割ってふるふる出汁ごと掬う

◆ 咲兵衛

ぬくもりを探し求めて。ときどきは、拒絶するため生まれてきたの

◆ 佐藤水魚

温麺が食べたい季節となりました蒲鉾入れて椎茸入れて

◆ 汐射ハルカ

くちびるの温度を知つてゐるひとのずるずる啜る蕎麦をみてゐる

◆ 西鏡

誰がために鐘は鳴るとう一節を探しあぐねる温きカフエソロ

◆ 雀來豆

北風が塗り替えていく自販機のあたたか〜いが灯台になる

◆ 十条坂

温もりに触れたら溶けてなくなるの そうよ私は灰色の雪

◆ 白石夜花

ストーブにやかんを乗せる 二人ともストーブ役だと思ってるけど

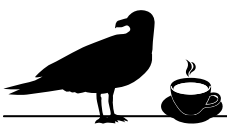
◆ 泰源

残照 アールグレイに一日の花、一日の波が浮かんで

◆ たえなかず

温かきみづの流るる音がして旧街道の舟場に出づる

◆ 高橋良



テーマ詠 「温」

あたたかくない手のひらが触れている肩甲骨の間から春
ぬくもりが伝わるような触れかたを記憶の中のきみはするのに
てのひらで手をあたためる いつせいにぼくらは冬に取り囲まれて
ふつつつと祈りの温度依存性 無毒のりんごを煮詰めるケース
省みて減った目たちが帰らない温かい手で目かくししてよ
温室でサボテン育ち昆虫が卵を産む砂虚構は要らない
温かい蕎麦のひとつじ掬いあげ二人静かに年を越す夜
アポロンとディオニュソスらの温かな臨死体験後の足のうら
ハンバーグからずり落ちた温玉は明日のことを考えている
温もりをもとめて指で猫の毛を逆立てしずむ眠りの底へ
君の手を温めさせてくれないか君が命を絶たないように
きらきらと薄き陽ざしにぬくむ猫冬の運河のほとりに眠る
温泉のひなびた宿の将棋盤 桂馬がひとつビールの王冠
待ちわびる東の海に曙の恋はほのかに身を温める
犬小屋で一夜を過ごす鉛筆と靴の匂いに包まれて寝た

◆ 麻倉ゆえ
◆ 雨虎俊寛
◆ 有村桔梗
◆ 歩歩
◆ 池田竜男
◆ 石川順一
◆ 一色凜夏
◆ 宇祖田都子
◆ 泳二
◆ hs
◆ 緒方燕柳
◆ 小崎ひろ子
◆ 音平まど
◆ 歌島孟
◆ 廻れ井戸

クラミツハ (二) 「祈る」

ともえ夕夏

七日後の運動会は雨だろう祖母は薬も飲まず咳き込む
未熟ゆえ祈る技術もなく空を仰ぐしかないクラミツハの子
学校が灰色に俯いていて母に「から祈りを習う」
雨雲の重さをずしんと両肩に背負いはじめて振るう大幣
よわつちいわたしを唾う雨音と神のばきんとしたみどり色
三日間籠り通したその間に英語と理科のノート届きぬ
しずやかな忌火のむこう暁がわたしの呼んだ朝が明るい
ああ晴れた 晴れたけれども多分もう十メートルも走れやしない

ギアが砕く

中村成志

朝の布団でとてもかなしいことがあり陽に当たらないよう崩さないよう
書き込みを待ち続けるのにも疲れたし神も戻ったしさあ、霜よ来い
スペインの平地へ主に降る雨のごとく滑舌良く指の節
夕かげに全体重を乗せて踏む囁んだ砂礫をギアが砕く
北風が坂の路面を撫で下ろす櫻紅葉はつぶてと化して
胴体の硬い部分を掌に撫ぜるあれは昨日は欠けていた月
桜並木の等間隔の寂しさよ堤に霜の溶けて煙れる
寒風に握る拳を雑踏のイルミネーションへゆるゆると振る

Happy Birthday

奈瑠太

ほんとなら越えるはずない歳の差を超えてしまえることに震える
もう君は年をとらない わたしだけ高野豆腐の末路をみるの
ほんとでも嘘でもいいよ 終のとき君の隣りにいてくれたひと
さみしさという結び目をやわらかくしてくれたひと 花を重ねる
義理はないけどありがとう 湯に足をほとばすように心が笑う
ハピバって毎年送ってたLINE空に歌えば星がこたえる
百八十七センチから見渡した阿佐ヶ谷の夜の終わりをみたい
笑い声耳でころころ鳴っていて好きだったって光る残像



もーニン狂ーティン

西淳子

おはようとペットボトルを弾いてたらウサギの群れが花を濡らした
 ぼくたちは白湯のお湯割りとか飲んで長生きしちゃうタイプなので
 野良猫で顔を洗えばメモ帳にオパビニア、オパビニア、オパビニア
 ドーナツにモザイクかけて！牛乳に目標ばかり食べさせないで！
 履歴書の特技の欄に歯磨きと返信をするイグニッションよ
 トイレットペーパーにキスしてました？郵便物は悪くないから
 寝不足の入浴シーン。ラジオにも教えてあげる檸檬の書き順
 占いの監修がノストラダムスで強くなりたい 行ってきます

大きくなれる

西村曜

ハンドクリーム、とてもきれいで寝転がる夫の首に塗りたくってる
 白いものばかりの鍋を食べ夫、あなたは水鳥に違いない
 ここだって死後じゃないのかじゃがいもを多めの油で炒めてるけど
 恥というやきみどりの感情を見せたくおもうきみどりなんだよ
 あなたならわたしの稲光になれる なって 地表を驚かせてね
 地上絵のタトゥーまぶたに入りたいな大きくなったら大きくなれる
 半額のローストポーク おめでどう あなたにわたしに名前があつて
 Twitter凍る夜更けがいつかきてマスクメロンのマスクって誰

USJ☆冬

ネコノカナエ

物語と物語との境目にテーマソングは折り重なって
 乗れないで見ている（見えない）とりあえず手当たりしたい手を振ってみる
 ひとりなら待たず乗れます（待たなすぎ）待つこと含みの物語なのに
 恐竜に待たずに会えるはずがないイチベルなしの演劇みたい
 フクロウは手に従って羽を上げ誰かの耳を包む街です
 おみやげはどの物語がいいですかふゆのあなたの頬の側には
 ほらあそこ高速道路のゆく先にもうちらりのりある物語
 スノーピーの首どっしりと丁寧に箱におさめて宅配託す

冬の陽だまり

薄荷。

ほろほるとブルドネージュ噛みしめる白くて甘い冬の陽だまり
 窓際にふたつ並べて置いたための飴色ラタンの小さな丸椅子
 軽やかなローゼンタールの野の花のカップで冬の紅茶を飲みほす
 街路樹はすっかり裸で冬の日には呑気な顔で夕暮れていく
 残業のあなたの帰りを待ちながら鍋のシチューはゆっくり冷める
 ラの音が半音くらいずれていて民族音楽めいた鼻歌
 爪までも青い回遊魚になってふたりで星の夜を揺蕩う
 カーテンも開けずにだらだら眠っている事後報告のような休日

拝啓 Vivienne Westwood 様

龍翔

エリザベス2世のあとを追ひ掛けるやうにパンクの女王は逝きぬ
 しばらくは家事手伝ひの妹の耳朶に輝くオーブが揺れる
 弘法にも筆の誤り ナオミ・キャンベルだつてランウェイでつまづく
 ボンテージパンツを履いた青年が寒々とゆく師走のミニミ
 革ジャンの黒なまめかし マフラーのタータンチェックの昏く燃えをり
 ピストルズとか聴いてみた なにかも壊したくつて抜いた髪の毛
 主人公より年下であつたのが二十年ほど生き過ぎてゐる
 UKに生きて行きたし Rest in peace. Vivienne Westwood.

サロメ

臙

生きてゐる チワワを抱いてスパーのベンチに立つてあなたをぢさんも
 土踏まざくすぐるやうに好きだから肉球がない恋をしてゐる
 返信のふいに途切れてペヤングはどうして声を上げるんだらう
 ナイロンの持ち手が黒いをぢさんが燃えるゴミだけあさるゆふぐれ
 チョコレート剥いてしまへば食べたくて銀紙だつて星だつたのに
 粘膜の音はいつでも高くつて信じるものはときどき泣くよ
 看板を持たされてゐるをぢさんのベンチコート裾の汚さ
 好かれてもまだ足りなくてみづ飴の棒いやらしくまはしてほしい

冬風

れいあむ

晦の蒼き街の灯を浴びて茫洋とする君のとなりで
 声高く愚かでいたいと叫ぶ頬そっくり色の冬苺の実
 隠れてる「君」がどこかにいると聞きコロナの海で桜待つ僕
 夜着の袖たどりし乾いた指先の愛しむ肌の沈む間に
 昂みてはずんだ息を案じてはおんなじ途を歩もうと決め
 灰白く光るスマホに君がいて寝酒の増えたぼく叱る夜
 ことごとと白菜を炊く母ひとり想えばこそその帰らじの暮
 終夜の列車の番をする人の仮の寝床に波の花咲く

雪の序章

六殿めらう

マスクして歩く母娘がそっくりでマスクの下も見てみたくなる
この辺はむかし羽前と言ったとか Zen なんだかとても強そう
旧県庁議事堂だった洋館で結婚式の前撮りと逢う
絵葉書のように撮られてた新郎と新婦おまけに写真屋さんも
村山の古民家はみなそっくりで売りに出ている茂吉の旧居
金持ちにおれがなるまで待ってたら聴禽書屋と名付けてあげる
積もらない雪でよかったこの町の余韻をそっと目に焼き付ける
「やまびこ」に「つばさ」が生えてここからは全速力で向かう東京

クリスマスはお早めに

お召し上がりください

村田一広

カタログのケーキは拡大されてみた現物の小ささに泣くクリスマス
マネキンが細部までリアルでせう？ 失踪した姉に瓜ふたつ
コンサートの舞台アイドル遠すぎて三次元とも二次元とも
大きさを競ふやうなる梨・りんご今日りんご勝つ八百屋店先
取り込むのが惜しくなるほど美しい夕焼け色にたなびくシート
雨降りのアプリで君と二人きりつねに満たしておく雨の音
(戻れるか) (たぶん戻れる) 足先から吸ひこまれゆく地下の迷宮
一年前ケーキを買った真つ暗な廃墟をよぎるクリスマスイヴ

みそか

早月くら

うつくしくすれ違う日々この街のひとの遠さを好きだと思ふ
あざやかな越境 きみは無駄のないフォームでドアをすり抜けてきた
まひるまの半月だから満ちるはず 予定ではなく予感が欲しい
淡々と向かい合わせに窓を拭くとおい未来の祈りの所作で
運命線見つかからないね、手のひらは裏側なのにひかりが似合う
昼と夜のあわいに影はたらずんであと何十年分の夕暮れ
きみの手で再び花にひらかれて蜜柑畑のひかりの最期
みそかみそか、きみを最初に笑わせるひとがわたしでありますように

君達に教わったこと

日笠山

夕虹は死者となりたる祖父の橋 月虹をゆく祖母に追いつけ
逆再生するように雨傘をたたむ今ピアノを諦めた
答えろよ鳥の目ヤニはどれぐらい大きいんだ自由の女神
絶対に貴方は死ぬのだから好き 死なない貴方ならば嫌いよ
染み渡る焚火の熱はイリーガル夜明けにブルーメンを目指そう
パンジーの畑にずっと立ってなさいそこに線路が敷かれぬように
バラをバラとはじめ言葉にした人は「馬鹿」という漢字を使わない
この風をグーグル翻訳にかけたら「貴方の恋は素晴らしいです」

日々旅にして

杜野詩季

子を預けコンビニへゆく日曜は旅行の心地育休中は
トランクに静かな興奮積ん読の山から二冊歌集を抜いて
親友の鉄ちゃんが行く先々でさらさら話す駅のうんちく
日常のしがらみ預かり溶かしゆく乳白の湯はまるく柔らか
マスコットは吊り下げられて長いこと車のわたしを全て見ていた
この旅は今じゃないとだめですか キャンセルボタンに静かに呼ばれる
満たされた人生でしたか父に訊く夏を迎える朝顔の双葉
透明の券売機から渡された復路の切符はもう皺だらけ

蓋はいうない

ゆりこ

菜の花を湯がけば数多の満月が浮くゆりかごのような雪平
油麩をぬるま湯でもどす浮いてくる夏の陽射しのようなキラキラ
血抜した牛すじを茹でるグルグルと生きた証の灰汁浮かびおり
煮え切らぬ返事に沸いたいつだって鰯の煮付けに蓋はいらない
白菜に重ねた嘘が滲みだしてクタクタになるまで煮てしまふ
グラタンの皿に残った汚れとか気になっっているけど気にしない
カロリーは気にする人の諦めと甘酢をからめる鶏の唐揚げ
その人は静かに暮らしていきたくいと残ったシジミの味噌汁を飲む

ロールプレイングライフ

羊葉零

復活の呪文はないと気づいた日もう戻れない大人になった
難易度の選択画面に戻して ハードモードにした記憶ない
細長いパーツが来ないテトリスのように揃わず積まれた短歌
限りあるMP使い働いた君は世界を少し救った
普段とは異なるせいで寝つけずに回復しない宿屋のベッド
褒められることの少ない日々だからレベルアップの曲を呟く
復活もセーブもできぬクソゲーを生きる僕らだ仲良くやろう
思い出の品は捨てたつもりだった昇龍拳を放てるこの手

白について

廣珍堂

白線はセーラー服の襟にゐてただ真つ直ぐに未来へ進む
電停に群るる男子の夏服が蒼天に撒く汗のエナジー
白磁には刺身のあとの血は固く海の音にも水とならずや
逢瀬するひとの白髪が増えるとも迎ふる朝の温もり増せり
窓からは薄き白知る雪の朝薄き布団はまたたくに冷え
都会ではゼブラゾーンの広くあり彷徨ふひとの中へと入る
山肌にはつかぬ雪を見る朝の盆地の底の通勤電車
故郷は白に埋もるる記憶のみ胸の底にいていよいよ固し

二〇二二年十二月十二日に

笹地静恵

名言集

まさけ

ふたご座の流星群を浴びた夜は見知らぬ兄へ手紙を書こう
古文書の文字をたどりに読み解けば黒きひとみの女人おとずれ
ペーコンとネギまじまじの目玉焼きさあ純粋の大根おろす
菊芋のシャリシャリという食感さ辛さを抜いたショウガのごとし
いつもあるものではないぞ電気とは演説のあと冷蔵庫へと
靈感の葛原妙子不可思議の奇妙な歌も日常の詠
新年のことを写してしまいこむまた一冊の文庫手帳を
年々に割いては散りてさくら花うちの嘆きのひびわれる音

年末旅行2022〜駿遠〜

福山桃歌

自転車

御糸さち

ひのとりが降り立つホーム メタリックレッドが青い夜明けをはじく
特急の大きな窓はモニターで知らない誰かの生活を映す
掛川も新富士もまだ静岡で三島も熱海もまだ静岡で
絵に描いたような山だ富士山はどこで見たって鮮やかな山
東京に向かう電車をぼんやりと見送る世界線の内側
とおとうみ朝のひかりを吸い込んで旅の途中の空はまぶしい
トーマスとバーティが競争する町をあの頃の君に見せたかったな
新大阪行きのみかりが照らしだす何処かに帰るひとの横顔

自転車で電柱にぶつかりながら思い出す中学の体育
息継ぎが出来なくて25m怒られたり笑われたりしてた
ほんとうにスローモーションになるんだなあ走馬燈過ぎても地面は遙か
これって歌になりませんか？トリビアの種は地中にまだ埋まってる
ハンドルとサドルとペダルそしてベル私が触れる全てのものよ
前にしか進めないのに堂々と公道を走っているなんて
自転車で溝にハマって笑ってる私を誰も笑うんじゃない
停まつてる自転車にぶつかったなら高確率で始まるドミノ

咲き初める夜

水也

国威発揚バーガー

深山睦美

終焉の野に咲く百合は儂くてかなしさを抱くそこで待ってて
不定形した腕かみより仄淡く誰かの愛が滲んでいたよ
人形の夢は絶えなく月明かり差し込むだけのつめたい部屋に
あしたには終わりにできる言い聞かせ棘を飲み込む血を吐いている
紡がれた糸の先へと落ちてゆくまだ早いよとだれも言わない
遠い空浮かべて綴る言葉たち嘘ばっかりで傷口にじむ
からっぽのカップをひとつなぞる指ここに誰かがいたことはない
記憶から抜け落ちていくさみしさは真冬に咲いた花火のように

独身という表現は不適切なので遠慮の塊と呼ぶ
「だしてくれー」としか言えないドラクエの牢屋にずっといるNPC
だるまさんがころんだ 今も月面でころび続けているだるまさん
引っ越し蕎麦引っ越しをする蕎麦。昨今、蕎麦は嫌な目に遭うと引っ越す。
マイナンバーカードに記録されている初めて君の手を握った日
初音ミクの髪色ほどの自由さで未来はきつと輝いている
大ピンチ！国威発揚バーガーを食べて国威を発揚しよう！
砂浜をやさしくなでるさざなみが君の心にありますように

東京モナムール

宮岡りょう

鈍痛

虫武一俊

付き合うと言われぬままの恋が増え 大人が自由とは限らない
女性用メンズスーツをくださいと言えば戦闘服が出てくる
働いて家に帰ればただ眠る 床に積まれた本とスニーカー
友達の結婚、出産、昇進を素直に祝えるうちに死にたい
おめでどう、結婚したのね、元の鞆、おめでどう、ああ、さよならあなた
仕事ではわたしの代わりいくらでもいるからせめてあなたくらいは
選ばれないほうの高橋さんとして今日も最終面接にいる
東京のどこかでわたし生きてます。迎えに来てね、地下鉄メトロに乗って。

誰のことも手助けしない同僚といて冬ざれの並木の静か
人柄は良いんだけど能力とやる気がないな 吐く苦い飴
やっぱりなことが起こって日本海側からここへ伸びる雪雲
運河沿いに喫煙所ありみな同じ方向を向く喫煙者たち
鈍痛を右眼に残してこの身から剥がれていった結膜結石
清掃に濡れた作業着 真下には環状線の天王寺行き
重たげに鯉が水面を跳ね上がりこのどぶ川に生かされるもの
欠けている部分を埋めるためにただ向かい続ける職の現場よ